

『古代アメリカ』 13, 2010, pp.53-61

〈調査速報〉

エルサルバドル共和国東部レンパ川下流域の考古学的調査

南川彰

(名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程)

1. はじめに

現在までエルサルバドル共和国における考古学的調査は、チャルチュアバ遺跡群に代表される西部およびホヤ・デ・セレン遺跡などが位置するサボティタン盆地に集中してきた（図1）。一方、エルサルバドルを東西に二分し、マヤ文化圏の境界線と考えられているレンパ川より東部ではほとんど調査が実施されてこなかった。本稿はエルサルバドル共和国太平洋岸、特にレンパ川下流域の考古学的調査について報告するものである。

メソアメリカにおける太平洋沿岸部はその重要性が指摘されながらも [e.g. Sharer and Traxler 2006] 調査が遅れている。エルサルバドル共和国では近年になりようやく本格的な考古学的および人類学的調査が始まった。例えば、フォンセカ湾周辺にはチキリン貝塚、コンチャグア島、アサンヤンバ遺跡など多くの先スペイン期遺跡や植民地時代の遺跡が所在しており、エルサルバドル共和国大統領府文化遺産局、エルサルバドル工科大学、名古屋大学などの調査団が踏査や小規模な発掘調査をおこなっている [e.g. Escamilla y Shibata 2005, 2006; Ito 2010; Genovéz 2006; Rivas 2005; Gómez 2005; Erquicia 2005, 2006; Méndez 2005; Valdivieso 2007]。

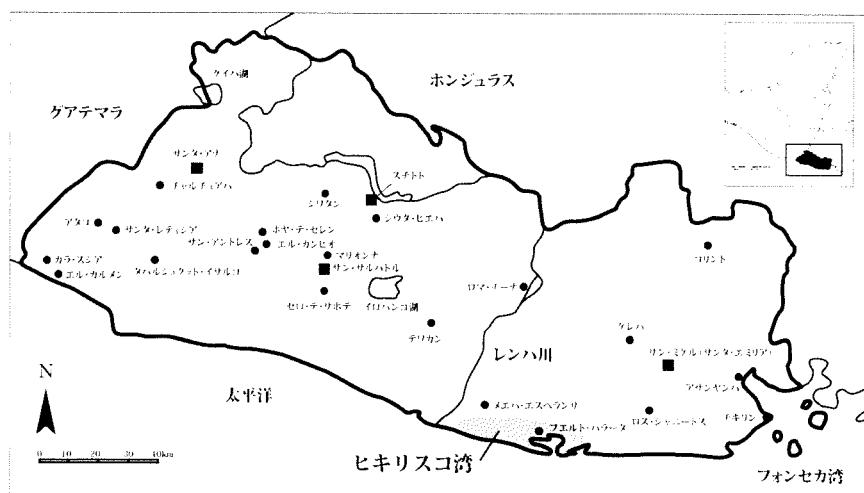


図1 エルサルバドル共和国の主要遺跡

筆者らは 2007 年からレンパ川下流域の考古学的調査に着手し、現在まで継続的に調査をおこなっている [Ichikawa 2009; Shibata y Ichikawa 2009]。以下では、レンパ川下流域ヒキリスコ湾岸に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学的調査について概観する。

2. 地理的環境

レンパ川下流域に位置するヒキリスコ湾周辺にはマングローブ樹林帯が広がり、一部では湿地帯が形成されている。雨期には大雨やレンパ川の氾濫により近隣住民は避難を余儀なくされることがある。先スペイン期においても人類に影響を与える同様な自然災害が起きていたことは想像に難くない。

ヌエバ・エスペランサ遺跡は首都サン・サルバドルから東へ約 70km のウスルタン県ヒキリスコ市に位置する。ヒキリスコ市の南には太平洋、東にはヒキリスコ湾が位置する。西約 2km にはレンパ川が、東にはエル・エスピノ川が流れている。遺跡が位置するヌエバ・エスペランサ地区周辺は 1979~1992 年に起こったエルサルバドル内戦中に国外避難し、戦後帰還した住民の居住域となっている。現在の同地区では、トウモロコシやココナッツ、カシューナッツ、サトウキビなどの農業と畜産業がさかんである。

3. 調査に至る経緯

2007 年 5 月にエルサルバドル文化芸術審議会考古課（現・大統領府文化遺産局考古課）はヌエバ・エスペランサ地区住民から水道管工事中に副葬品を含む人骨（以下、埋葬 1）を発見したとの報告を受けた。ただちに調査員が派遣され、資料の回収および状況確認をおこなった。

住民の報告によれば、埋葬 1 は白色砂層（火山灰）を掘り下げたものの黒褐色土層から出土した。東西方向の伸展葬であったようである。エルサルバドル人形質人類学専門家ダニエル・フロリッチが出土人骨の予備的分析をおこない、成人女性と幼児であることが明らかとなった。これらの人骨に伴って動物形象香炉や四脚付浅鉢形土器など計 13 点の副葬品がみつかった。

住民による発見と予備的分析の結果を受け、文化芸術審議会考古課とヌエバ・エスペランサ地区住民との間で協議がおこなわれ、2007 年 12 月 10 日から 21 日にかけて発掘調査が実施された。これまで測量調査、出土貝の調査、出土遺物と出土人骨の分析がおこなわれた。

4. ヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学的調査

4-1. 2007 年発掘調査

本調査では①埋葬 1 の原位置の確認、②その他の考古学的遺構・遺物の確認、③基本層序の把握、を目的として 1 号トレンチ（南北 4m×東西 6m）を設定した。

調査の結果、埋葬 1 のおおよその位置を確認することができたものの、詳細な情報を得ることはできなかった。しかし、埋葬 1 が検出されたと推定される地点の周囲から 6 点の完形土器が出土した。住民により発見された人骨とともに出土した 13 点の土器同様に副葬品と考えられる（図 2）。

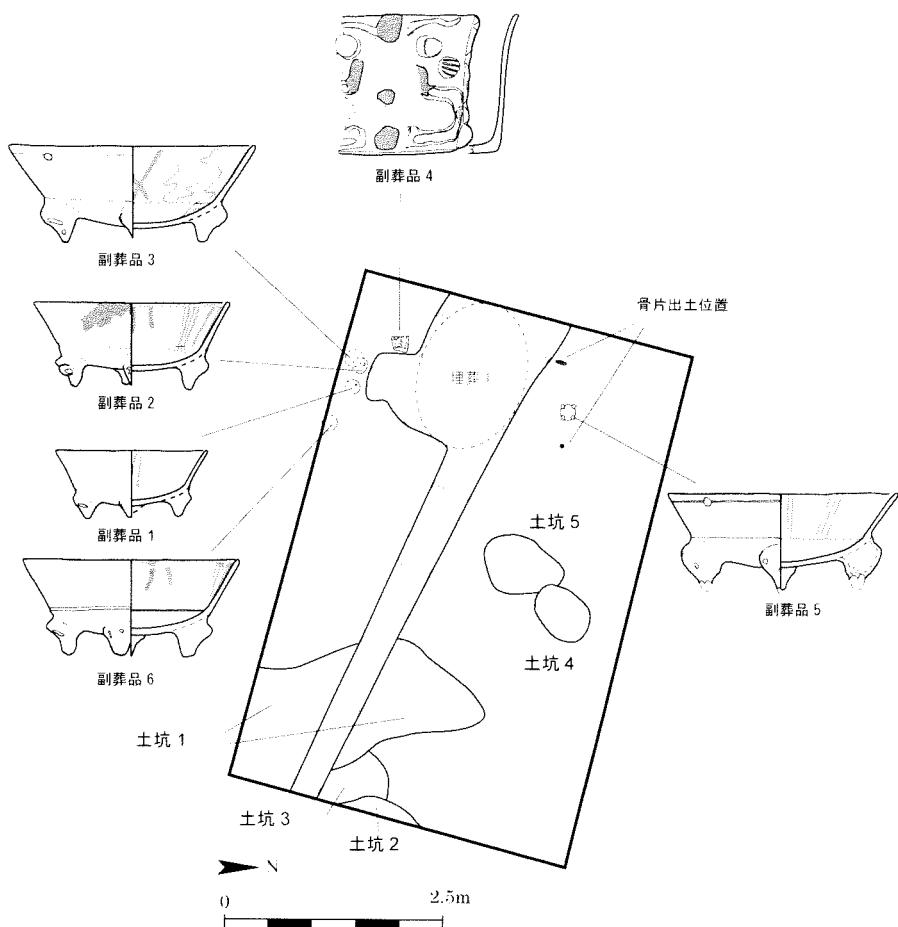


図2 ヌエバ・エスペランサ遺跡1号トレンチ

土器は口縁部を下にして配置されていた。先スペイン期の生活面と考えられる黒褐色土層直上でみつかり、幾層もの白色火山灰層によって覆われていた(図3)。北村繁氏(弘前学院大学准教授・火山灰編年学)により、白色火山灰層は紀元後4~6世紀に噴火したイロパンゴ火山起源のものと同定された。白色火山灰層は厚さ約30cmの一次堆積層と、洪水などによって運ばれ堆積した厚さ約135cmの二次堆積層から成る。白色火山灰中には一切遺物は含まれていない。したがって、紀元後4~6世紀以降人々が居

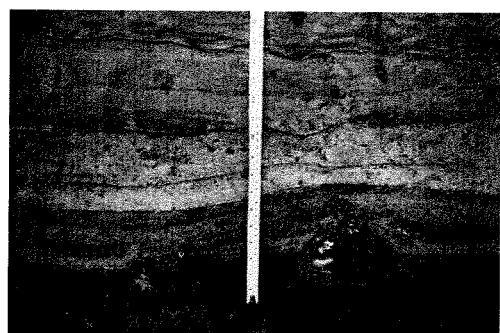


図3 副葬土器の出土状況

住しなかった可能性が高い。図3にみられる土器の中には数cmだが白色火山灰が観察されることから、副葬品は火山灰降下中に配置された可能性がある。トレント南東隅では土坑が5基検出された。黒曜石片、土器片、貝片などが出土しており廃棄場と想定される。

4-2. 2009年測量調査

2009年2月に将来の本格的な調査のため、ヌエバ・エスペランサ地区の測量調査および遺物の分布調査をおこなった(図4)。調査の成果は以下の通りである。

北側のエル・エスピノ川近辺の露頭では白色火山灰層の下に貝片、黒曜石片、大量の粗製土器片の堆積層が確認できた。粗製土器片はすべて破片で強い二次焼成を受けている。また精製土器も収集でき、その出土状況を考慮すると粗製土器は特殊な用途を持つ土器と予想される。南側の1号トレント周辺においても多くの土器片が採集できる。また、地区の中心部でも多くの遺物がみつかると住民から報告されている。今回の調査で遺物分布範囲は少なくとも約1.8km²に及ぶことが明らかとなつたが、さらに遺物分布範囲は広がる可能性がある。

標高は約2mで、現地表面では大きな起伏はみられない。また、周辺ではメソアメリカに広くみられるマウンドなどの建造物を示唆する遺構を確認することができなかつた。

4-3. 出土貝の調査

レンバ川下流域にあるヒキリスコ湾では独立行政法人国際協力機構(JICA)による「貝類増養殖開発計画プロジェクト」がおこなわれている。出土貝および周辺地域の自然環境について調査するため可児清隆氏(当時:JICA専門家)を訪問した。

2007年の発掘調査では、赤貝(クリル)や巻貝、牡蠣が出土している。ヌエバ・エスペランサ遺跡出土の牡蠣は縦長に成長するのに対して、ラ・ユニオン県チキリン貝塚出土の牡蠣は楕円形に膨らみながら成長する特徴を有している(図5)。これは牡蠣の生息域と関連しており、前者の牡蠣は砂浜など、後者の牡蠣は岩などに

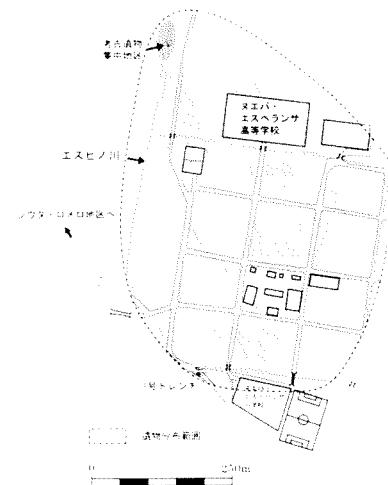


図4 遺物分布範囲

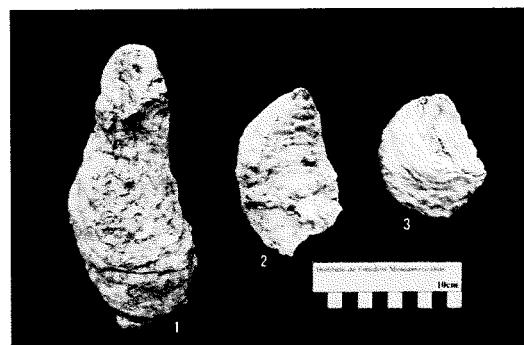


図5 考古遺跡出土の牡蠣
(1, ヌエバ・エスペランサ遺跡出土、
2, 3, チキリン貝塚出土)

付着して生息するという違いがある。牡蠣は栄養学上の重要性が高いと言われており、先スペイン期のエルサルバドル太平洋沿岸部でも採取されていたと思われる^(註1)。

4-4. 出土遺物

2007年の発掘調査では土器、黒曜石、石製品が出土している。土器は次の5類にわけられる(図6)。

第1類はクリーム地にオレンジ化粧土、口縁部に赤彩、土器内外面にネガティブ文が施された土器である。他に粗い凹線やボタン状突帯などの装飾もある。器壁がやや外反する浅鉢形土器で動物形象四脚を持つ。第2類は第1類と同じ土器表面の特徴を有するが口縁部が赤く彩色されていない土器である。器壁がやや外反する浅鉢形土器で動物形象四脚を持つ。口縁部の平坦部分に凹線が施されるものや当該地域に代表的な胴部が大きく外反する浅鉢形土器もみられる。胴部に頸状、鎖状突帯がつく土器もある。第1類同様に動物形象四脚を持つ。第3類は茶褐色化粧土をもつ土器であり、器壁がやや斜めに立ち上がる四脚付浅鉢形土器である。第4類は化粧土や装飾の施されていない粗製土器である。第5類は動物形象円筒形香炉である。表面は茶褐色の化粧土が施されている。これらの土器群は土器の諸特徴と層位学的見地により先古典期終末期から古典期前期ごろに位置づけられる。

ここでは、第4類の粗製土器に注目したい。粗い胎土で、破片資料のみであるが、尖底で器壁がやや斜めに立ち上がる器形とやや口縁部が内湾する器形の2種類が考えられる。底部の厚さが1.4~2.2cm、胴部の厚さが0.7~1.1cmである。底部には強い二次焼成の痕跡がみられ、口縁部は肥厚している。エル・エスピノ川周辺で大量にみられるこの土器については特殊な用途を持つ可能性を指摘した。これらの土器は特殊な出土状況と土器の特徴から、先スペイン期の生業、とりわけ沿岸部では製塩活動に用いられた可能性が考えられる非常に興味深い資料である。

黒曜石は全て破片であり、原産地の同定はされていない。しかし、近隣に黒曜石の原産地がないことから、遠距離交易によってもたらされた可能性がある。

石製品はヌエバ・エスペランサ地区西側で表採された遺物であり、メタテと思われる。

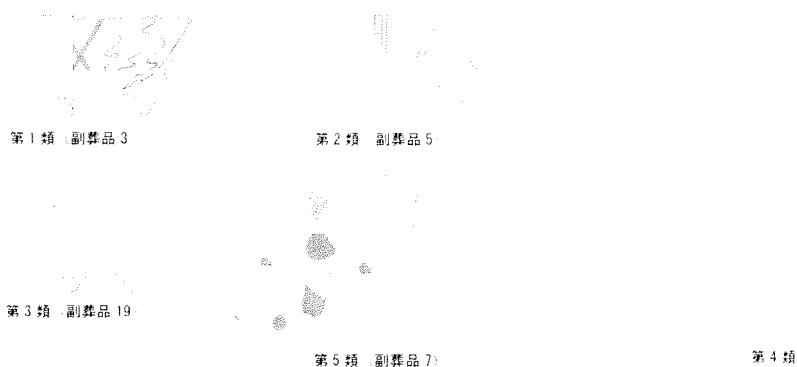


図6 ヌエバ・エスペランサ遺跡出土の土器

4-5. 出土人骨

ヌエバ・エスペランサ遺跡出土人骨の分析は、森田航（京都大学大学院）がおこなった。

2体分の人骨が出土している。人骨1は頭骨を除き、四肢骨など大部分の骨格が残っていた（図7）。骨盤の形態的特徴から推定死亡年齢30～40歳の女性と思われる。身長は左脛骨を用いたヘノベスの身長推定式[Genovés 1967]から約156cmという値を得た。四肢骨は女性のわりに筋付着面が発達し頑丈である。右の緋骨の骨頸部の内側から前下方に向けて骨軟骨種^(註2)が形成されている。人骨2は下顎骨体の左側のみが出土した。萌出前と思われる乳臼歯が2本歯槽に残存しており、推定死亡年齢6±3ヶ月歳と推定された。

これらの人骨は同一地点で出土したことから当初は母子関係にあると想定されていたが、それらを裏付ける遺伝学的根拠を得られていない。

5. 考察

メソアメリカ太平洋沿岸部では、メソアメリカ文化の中でも古い段階から土器製作がおこなわれ初期定住村落が成立した。メキシコのチアパス州太平洋岸に位置するパソ・デ・ラ・アマダ遺跡では先古典期前期・中期段階にすでに階層化された社会の存在も示唆されている〔Blake 1991〕。また、イサバ遺跡やタカリク・アバフ遺跡などはオルメカ文化の拡散ルートとして考えられている〔Lowe 1977〕。太平洋沿岸部はメソアメリカ史を再構築する上で多くの示唆に富む重要な地域であると位置づけられる。

ここでは、前述した調査成果から可能な限りヒキリスコ湾周辺社会の実態について考察してみたい。

ヒキリスコ湾周辺では、マウンドなどがみられずどのような性格の遺跡が存在するのかよく分かっていない。本調査では埋葬、廃棄場、大量の粗製土器片などの考古学的情報が得られた。埋葬1は19点の副葬土器を伴っており、この量は同時期である先古典期後期から終末期を代表するチャルチュアバ遺跡出土の副葬土器数（平均約3個）と比較しても多い。高位の人物の存在が考えられる。廃棄場では、牡蠣や赤貝、動物骨などが出土しており、多様な食生活が営まれていたと思われる。粗製土器片はその特徴から製塩土器と推測され、エル・エスピノ川の大量の土器片は、大規模な製塩活動を想起させる。また、近くに原産地のない黒曜石の存在は他地域との交易を示唆する。ヌエバ・エスペランサ遺跡ではこうした人類活動は4～6世紀に起きたイロパンゴ火山噴火によって終焉を迎えた。一方、ヌエバ・エスペランサ遺跡から東約30kmに位置するブエルト・パラーダ遺跡では、古典期後期の多彩文土器もみられることから、ヒキリスコ湾内で人々が移動した可能性も考えられる。

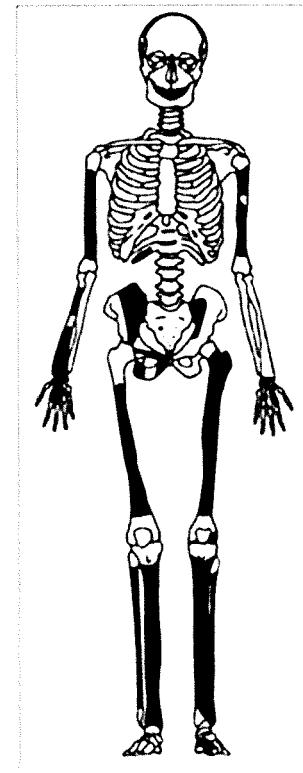


図7 人骨1の出土部位
(森田航作成)

6. おわりに

太平洋沿岸部社会の実態を解明するには調査研究が不足しており、現在のところ多くを語ることはできない。しかし、今回の調査によって太平洋沿岸部社会に関する貴重なデータが得られた。特に、塩や貝など生業に関連する資料が得られたことは本調査の大きな収穫といえよう。メソアメリカにおける土器製塩研究は遅れた分野であり、今後炉址など作業面の検出も含めて調査を継続する必要がある。人体に必要な塩を生産するための製塩活動は太平洋沿岸部社会において特に重要視された生業活動であったと推測され、専業集団の存在の有無などその生産体制が問題となる。塩の入手が困難であったであろう内陸部の社会に供給できるだけの生産量を維持することは太平洋沿岸部社会の発展に深く関連していたと想定される。そしてそれに伴い交易網が発達したと考えられる。

また、本調査では遺物との層位学的関係が明確なイロパンゴ白色火山灰層が確認された。イロパンゴ白色火山灰層は先古典期と古典期を分かつ指標（紀元後 260 年）として認識されてきた。近年、ダルら [Dull et al. 2001] や北村繁 [Kitamura 2010] の研究成果により、紀元後 400 年頃という説が展開しつつあるものの、測定資料数や精度の問題など解決すべき課題が残されている。また、従来はイロパンゴ火山の火口から西側に広く降下し、人類史に大きな影響を及ぼしたとされてきた [Hart and Steen-McIntyre 1983]。しかし、火口から東に位置するヌエバ・エスペランサ遺跡の例から、イロパンゴ火山噴火の影響が及んだ範囲とその度合いについて再考が必要であるといえる [Kitamura 2009]。遺物と火山灰層の関係が良好なヌエバ・エスペランサ遺跡の今後の調査は、イロパンゴ火山噴火の問題解決にもつながるであろう。

エルサルバドル共和国の太平洋岸沿岸部には注目すべき遺跡は決して少なくない。例えば、同国西部には先古典期前期の土器が出現しているエル・カルメン遺跡や古典期後期のグアテマラ太平洋岸に栄えたコツマルワパ文化の影響が示唆されているカラ・スーシア遺跡、同国東部には冒頭にも述べたフォンセカ湾周辺の遺跡などがある。こうした太平洋沿岸部地域の調査研究を進めながら、チャルチュアバ遺跡やホヤ・デ・セレン遺跡そしてケレバ遺跡など内陸部と太平洋沿岸の相互関係を解明することが今後の課題といえる。

【謝辞】

本調査はエルサルバドル大統領府文化遺産局考古課、エルサルバドル工科大学人類学教室、国際協力機構青年海外協力隊のご協力のもと実施されました。厚く御礼申し上げます。また、調査の一部は協力隊を育てる会平成 20 年度帰国隊員/青年支援プロジェクト研究助成「帰還民居住域の観光開発のための文化遺産活用に関する研究プロジェクト—エルサルバドル東部地域を例として—」によって実施されました。ヌエバ・エスペランサ地区住民の方々には多大なるご支援およびご理解を頂戴いたしました。重ねて御礼申し上げます。

註

- (註 1) 現在、ヒキリスコ湾周辺では天然牡蠣の採取は難しいとされている。また、エルサルバドル工科大学考古学専攻生がラ・ウニオン県チキリン貝塚出土の貝の予備的分析をおこなったところ、周辺に岩場の多い同貝塚からヌエバ・エスペランサ遺跡と同様な縦長の牡蠣が

散見された。そのため縦長の牡蠣が交易などによってもたらされた可能性も考えられる。

今後の分析を期待したい。

- (註 2) 主に大腿骨の遠位や、脛骨の近位に見られる。骨端線から骨幹にそって伸びる腫瘍で、緻密骨は骨幹から連続し、先端に軟骨のキャップが付く。多くの場合 30 歳以前に形成される。疼痛や関節の可動制限が起こることもあるが、多くは無症候性である。

参考文献

Blake, Michael

- 1991 An Emerging Early Formative Chiefdom at Paso de la Amada, Chiapas, Mexico. In The Formation of Complex Society in Southeastern Mesoamerica, edited by William R. Fowler Jr., pp.27-46. CRC Press. Florida.

Erquicia C, José Heriberto

- 2005 Investigaciones Arqueológicas en la Zona del Golfo de Fonseca, El Salvador. In Colección Arqueología-Facultad de Ciencias Sociales, Escuela de Arte y Cultura de la Universidad Tecnológica de El Salvador No.2. UTEC, San Salvador.
- 2006 Golfo de Fonseca -Una Panorama de la Investigación Arqueológica en El Salvador. In El Salvador Investiga Año.2, No.3: 34-41. CONCULUTRA, San Salvador.

Escamilla, Marlon y Shione Shibata

- 2005 Rescate arqueológico en El Chiquirín, golfo de Fonseca, La Unión, El Salvador. In XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004, editado por J.P. Laporte, B. Arroyo y H. Escobedo, pp.549-553. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- 2006 Rescate Arqueológico en Punta Chiquirín, un Conchero Prehispánico del Golfo de Fonseca. El Salvador Investiga Año.2, No.3: 26-33. CONCULUTRA, San Salvador.

Genovéz, José Vicente

- 2005 Proyecto Municipal Bello Amanecer, Uluazapa, San Miguel. Informe final presentado al Departamento de Arqueología de la Dirección Nacional de Patrimonio Cultural de CONCULTURA, San Salvador.

Genovés, S.

- 1967 Portionality of the long bones and their relation to stature among Mesoamericans. American Journal of Physical Anthropology 26:67-78.

Gómez, Esteban

- 2005 CONCHAGUA VIEJA: Historia y arqueología de un pueblo indígena en la isla Conchagüita en el Golfo de Fonseca. In GOLFO DE FONSECA : Colección de Estudios Culturales, editado por Departamento de Arqueología de CONCULTURA, pp.68-89. CONCULTRA, San Salvador.

Hart, William J.E. and Virginia Steen-McIntyre

- 1983 Tierra Blanca Joven Tephra from the AD 260 Eruption of Ilopango Caldera. In Archaeology and Volcanism in Central America -The Zapotitan Valley of El Salvador, edited by Payson D. Sheets, pp.

14-43. University of Texas Press. Texas.

Ichikawa, Akira

- 2009 Informe Final-Investigaciones Arqueológicas de Nueva Esperanza, Bajo Lempa, Usulután, El Salvador. Departamento de Arqueología de la Secretaría de Cultura de la Presidencia de la República de El Salvador, San Salvador.

Ito, Nobuyuki (ed.)

- 2010 Informe Final del Proyecto Arqueológico de Concheros en el área de Punta Chiquirín, Departamento de La Unión 2006-2009. Proyecto Arqueológico de El Salvador, Nagoya.

Kitamura, Shigeru

- 2009 Revaluation of impacts of teh 4th century gigantic eruption of Ilopango Caldera on ancient Mesoamerican societies (Report to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology for 2006-2008, Grant-in-Aid for Scientific Research No. 18510159).

- 2010 Two AMS Raiocarbon dates for the TBJ tephra from Ilopango Caldera, El Salvador, Central America. Bulletin of Social Work, Hirosaki-Gakuin University, No.10, pp.24-28.

Lowe, Gareth W.

- 1977 The Mixe-Zoque as Competing Neighbors of the Lowland Maya. In The Origins of Maya Civilization, editied by Richard E.W.Adams, pp.183-195. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Méndez, Miriam

- 2005 Informe Final con los Resultados Obtenidos de la Prospección Arqueológica Realizada en el tramo donde se desarrollara el proyecto “Línea de Transmisión AES Fonseca Energía”, Departamento de La Union. Departamento de Arqueología de CONCULTURA, San Salvador.

Rivas, Ramón

- 2005 Antropología y Arqueología de la Isla Conchagüita en el Golfo de Fonseca. In Colección Antropología. Facultad de Ciencias Sociales, Escuela de Arte y Cultura, Universidad Tecnológica de El Salvador, No.6, UTEC, San Salvador.

Sharer, Robert J. and Loa P. Traxler

- 2006 The Ancient Maya 6th edition. Stanford University, California.

Shibata, Shione y Ichikawa Akira

- 2009 Investigación Arqueológica en Nueva Esperanza, Bajo Lempa, El Salvador. XXII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2008, editado por J.P. Laporte, B. Arroyo y H. Escobedo, pp.567-568. Museo Nacional de Arquelogía y Etnología, Guatemala.

Valdivieso, Fabricio

- 2007 ASANYAMBA: Un Importante sitio en las costas del Golfo. El Salvador Investiga Año.3, No. 6: 5-19. CONCULUTRA, San Salvador.

